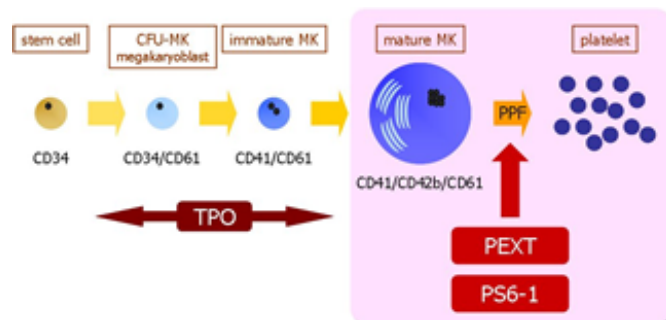


ピーナツ種皮に含まれる血小板産生促進因子の 医薬品化を志向した試験

企業 / 株式会社常磐植物化学研究所

研究者 / 森田 育男 (国立大学法人東京医科歯科大学大学院
医歯学総合研究科 教授)



▲ 血小板分化のスキームとPS6-1の作用点

血小板数の減少によって出血が止まりにくくなり、進行すると頭蓋内出血などを招く血小板減少症には、現在治療薬が存在しない。国内外の製薬各社において生体内の造血因子であるトロンボポエチン（TPO）様作用を示す化合物が医薬品候補として開発中であるが、TPOは血小板の前段階である巨核球の成熟までを促進するものの血小板形成はむしろ抑制するため、有効な治療薬になり得ないとの見方もある。

本課題では、ピーナツ種皮から見出した、TPOとは作用点の異なる血小板産生促進因子（PS6-1）の新規医薬品化を志向した試験を行った。その結果、PS6-1の製造方法を確立し、7種類の新たな活性化合物を合成した。また、これらの化合物の作用機序の検討も行った。

今後は、得られた化合物を医薬品候補として製薬開発のラインに乗せるため、動物実験により有効性を証明する。PS6-1の作用点は巨核球から血小板への最終分化過程であることから、TPOとの組み合わせによって一層の効果を発揮する可能性もある。